

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

チャトゲコナジラミの新たな地域での発生確認と 今後の防除対策について

県内の茶園においてチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。本種による春季の被害を防ぐには、冬期の薬剤防除を徹底し増殖源となる越冬幼虫の密度を低く抑えることが重要です。

つきましては、下記事項を参考に防除対策を徹底してください。

記

1. 県内でのこれまでの発生状況

- 1) 平成26年3月下旬に、県西部の一部茶園において、チャトゲコナジラミの発生を確認した（[平成26年4月9日付病害虫発生予察特殊報第1号参照](#)）。
- 2) 本年12月上旬に、県東部地域の9園地において、新たに発生を確認した（表1）。

2. 防除対策

- 1) 園内をよく観察し発生状況を把握する。成虫は新芽（図1）、幼虫は茶園周縁のすそ部葉裏（図2・3）に寄生しやすい。また、下位葉にすすを生じている場合は発生している可能性が高い（図4）。
- 2) 発生茶園においては、ハダニ類の防除を兼ねて、冬期にマシン油乳剤の散布を必ず行い、越冬個体の密度低減を図る。なお、マシン油の防除効果は、希釈倍率が適用範囲内で低い（濃い）方が高く、また、1回よりも2回散布で高まる。
さらに、春期（一番茶後）以降は表2を参考とし、成虫の発生をみながら適期防除を行う。
- 3) 葉裏に薬剤が十分かかるよう、すそ部から茶株頂上部に向けて斜め上方向に薬液を散布する（すそ重点散布法）。本散布法は慣行散布に比べ甚発生時で2倍以上の防除効果がある（農林水産省チャトゲコナジラミ防除マニュアルより）（図5）。また、散布前にすそ刈りを行うと、薬液の付着程度が向上し防除効果が高まる。
- 4) 茶園間での成虫や寄生葉の持込み、移動を避けるため、複数の茶園を移動しながら作業、防除を行う場合は、未発生園から先に行う。発生茶園での作業終了後は機械を掃除する。特に乗用管理機は掃除を徹底する。また、成虫の持込みを避けるため、発生茶園から未発生茶園への被覆資材の短期間での掛け替えは行わない。
- 5) 多発園では、一番茶後に中切りや深刈り更新により寄生葉を除去し、幼虫の生息密度を抑制する。なお、除去した枝葉は、土中に埋設する等適切に処理する。

表1 県東部地域の茶園におけるチャトゲコナジラミの寄生葉率（12月2日 各圃場100葉調査）

園地番号	A	B	C	D	E	F	G	H	I
寄生葉率(%)	84	85	92	90	4	15	50	40	25



図1 新芽に寄生する成虫

図2 幼虫

図3 葉裏に寄生する幼虫

図4 幼虫が分泌する甘露によるすす病

表2 チャトゲコナジラムの薬剤防除例※

散布時期	薬剤名 (成分名)	希釈倍数	散布量 (L/10a)	使用時期	使用回数
秋整枝後～3月 (越冬期)	ダニゲッターフロアブル (スピロメシフェン)	2,000倍	200～400	摘採7日前まで	1回
	アタックオイル (マシン油)	50～100倍	200～400	—	—
	ラビサンスプレー (マシン油)	75倍	200～400	—	—
5月下旬 (第一世代 若齢幼虫期)	アプロードエースフロアブル (ブプロフェジン・ フェンピロキシメート)	1,000倍	200～400	摘採14日前まで	2回以内
	コルト顆粒水和剤 (ピリフルキナゾン)	2,000～ 3,000倍	200～400	摘採7日前まで	2回以内
7月下旬 (第二世代 若齢幼虫期)	コテツフロアブル (クロルフェナピル)	2,000倍	200～400	摘採7日前まで	2回以内
	ハチハチ乳剤 (トルフェンピラド)	1,000倍	200～400	摘採14日前まで	1回
9月下旬 (第三世代 若齢幼虫期)	ダントツ水溶剤 (クロチアニジン)	2,000倍	200～400	摘採7日前まで	1回
	ディアナSC (スピネトラム)	2,500～ 5,000倍	200～400	摘採前日まで	1回

※表中の農薬登録情報は平成27年12月4日現在のものであるため、薬剤の使用にあたっては必ず最新情報を確認する。

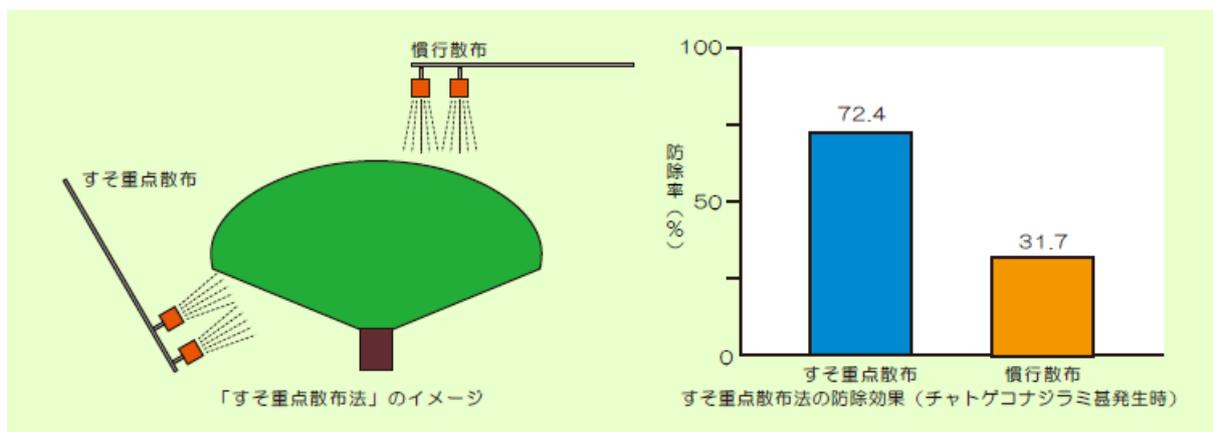


図5 すそ重点散布法 (チャトゲコナジラム研究推進連絡会原図)